

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『新編酔翁談録』の描写の特徴について
Author(s)	孟, 夏
Citation	中國中世文學研究 , 69 : 24 - 60
Issue Date	2017-03-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00043761
Right	
Relation	



『新編醉翁談録』の描写の特徴について

孟夏

はじめに

『新編醉翁談録』（以下『醉翁談録』とする）は宋末元初の頃に編集された小説集である。「廬陵羅燁編」と題されていることから、廬陵（現在の江西吉安）の羅燁によって編纂されたと考えられるが、詳細は不明である。甲から癸まで全十集、每集は二巻で、合計二十巻である。中国ではすでに散佚しており^{〔1〕}、現在目にしうる版本は天理大学附属天理図書館に収蔵されている観瀾閣旧蔵本のみである^{〔2〕}。

筆者は『醉翁談録』に収められている全八十話について、その話が他のどの書物に収められているかを調査した。その結果をまとめたものが末尾に付した【表】である。【表】から明らかのように、『醉翁談録』所収の話の中には、先行する他の書物には見られず、『醉翁談録』にのみ見られるものもある。例えば丙集巻一の「因兄姊得成夫婦」は、現在『醉翁談録』にしか確認できない。しかしこの物語は馮夢龍によって編纂された『醒世恒言』巻八「喬太守乱点鴛鴦譜」の本事であり、馮夢龍は『醉翁談録』を参考にしていた可能性

がある^{〔3〕}。実際、明代の書物の中には、『醉翁談録』に関する記事が複数見られる。例えば、明・李詡『戒菴老人漫筆』巻六に「『醉翁談録』引子言、『小説者、或名演史、或謂合生、或稱舌耕、或作挑閃。』（『醉翁談録』の引子に言ふ、『小説なる者は、或いは演史と名づけ、或いは合生と謂ひ、或いは舌耕と称し、或ひは挑閃と作す。』）とあり、また『永樂大典』巻五八三八には「宋林美戴御花詩」が収録され、出典は『醉翁談録』と書かれている。この詩は現在『醉翁談録』戊集巻二に収録されている。更に、『永樂大典』二四〇五「蘇小卿」の注に、出典は『醉翁談録』「煙花奇遇」であると説明されている。但し現存している『醉翁談録』には「蘇小卿」に関する作品は見られないので、「蘇小卿」は佚篇であろう^{〔4〕}。その他にも、現在『醉翁談録』にしか見られない話で後世の書物に同話や類話が確認できるものが複数ある^{〔5〕}。つまり、明代の人は『醉翁談録』を読み、その影響を受けていた可能性が高いのである。

こうしたことから、『醉翁談録』が小説史の流れを知るための重要な資料であることが窺える。しかし関

係資料が少ないこともあり、その成立過程や編纂意図などについては、未だ不明な点が多く残されている^{〔6〕}。

上述したように、『醉翁談録』に収められる話には『醉翁談録』にしか見られないものもあるが、同時代の他の書物に収められているものも多数確認できる。そこで本稿では、『醉翁談録』所収の話を他の書物に収められているものと比較することによって、『醉翁談録』の描写の特徴を明らかにしようと思う。そこから、本書がどのような性質の書物であるのか、どのような目的で編纂されたのかについても考えてみたい。

一 『醉翁談録』の描写の特徴

『醉翁談録』の同話に関する先行研究には、小松建男氏の「『封陟』の改作―『太平広記』から『醉翁談録』へ―」がある^{〔7〕}。小松氏は、『醉翁談録』己集巻二所収の「封陟不従仙姝命」（以下「封陟」とする）を中心に、『太平広記』『類説』『緑窓新話』に収められる同話を比較することで、『醉翁談録』の本文が『類説』と最も近いことを明らかにし、また『醉翁談録』では他の書物に比べて会話文が多いことから、本書では会話を豊富にすることによってより鮮明な人物像が作られていると指摘された。

今回、筆者はこの「封陟」以外にも、『醉翁談録』所収の物語のうち、『太平広記』『類説』『緑窓新話』

など、現存する前代もしくは同時代の書物に同話が見られるものを全て取り上げ、同様の方法を用いて、比較、検討を行った。今回考察の対象としたのは、全五十六話である（【表】の篇名に○を付けた）。その結果、小松氏の指摘以外にも、『醉翁談録』の性質そのものに関わる描写の特徴が確認できた。

まずは『醉翁談録』の特徴が最もよく現れていると思われる乙集巻二「唐宮人製短袍詩」を取り上げる^{〔8〕}。

乙集巻二「唐宮人製短袍詩」

①唐開元中、頒賜邊塞軍卒寒衣。玄宗乃命六宮美人裁製。有一兵士、於短袍中得詩一首、云、

「詩曰」

沙場征戍客、寒苦若爲眠。

戰袍經手作、知落阿誰邊。

蓄意多添線、含情更著綿。

今生已過也、結取後身緣。

兵士乃以此詩白於主帥。帥進之玄宗。玄宗命以詩

偏示六宮、曰、「此詩是誰作。有作者、言之勿隱、

吾不汝罪。」②有一宮女何氏、自言、「某製。萬罪、

萬死。」③玄宗深憫之、乃以何氏嫁於得詩之兵士。

成禮之夕、宮人仍謂兵士曰、「我與汝結今生緣、非

後身緣也。」相與媾歡。由此邊人無不感念聖恩、盡

忠守禦、邊塞為之安寧。^{〔9〕}

① 『醉翁談録』 唐開元中、頒賜邊塞軍卒寒衣。玄

宗乃命六宮美人裁製。

『本事詩』(顧氏文房小說本) 開元中、頒賜邊

軍繡衣、製於宮中。

『太平広記』(談刻本) 開元中、頒邊軍繡衣、

製於宮中。

『唐詩紀事』(明嘉定十七年刻本) 開元中、賜

邊軍繡衣、製於軍中。

『類説』(明天啓本) 開元中、賜邊軍繡衣、製

於宮中。

『古今事文類聚』(明万曆甲辰刻本) 開元中、

賜將軍士大夫繡衣、製於宮中。

『全唐詩話』(明万曆十三年刻本) 開元中、賜

邊軍繡衣、製於宮中。

『詩話總龜』(明嘉靖甲辰刊本) 開元中、賜邊

將軍繡衣、製於宮中。

『吟窓雜録』(明抄本) 開元中、賜邊衣。

①は、『醉翁談録』では「頒賜邊塞軍卒寒衣」となっているが、『太平広記』では「頒邊軍繡衣」、『類説』でも「賜邊軍繡衣」となっている。「邊軍」「繡衣」よりも、『醉翁談録』の「邊塞軍卒」「寒衣」の方が、表現はより白話に近いと言える。

② 『醉翁談録』 有一宮女何氏、自言、「某製。萬

罪、萬死。」

『本事詩』 有一宮人自言萬死。

『太平広記』 有一宮人自言萬死。

『唐詩紀事』 有一宮人自言萬死。

『類説』 有一宮人自言萬死。

『古今事文類聚』 有一宮人自言萬死。

『全唐詩話』 有一宮人自言萬死。

『詩話總龜』 有一宮人自言萬死。

『吟窓雜録』 該当なし。

②では、『醉翁談録』は宮女の姓が記され、さらに彼女のセリフが長くなっている。

③ 『醉翁談録』 玄宗深憫之、乃以何氏嫁於得詩之

兵士。成禮之夕、宮人仍謂兵士曰、「我與汝

結今生緣、非後身緣也。」相與媾歡。由此邊

人無不感念聖恩、盡忠守禦、邊塞為之安寧

[10]

『本事詩』 宗深憫之、遂以嫁得詩人。仍謂之曰、

「我與汝結今生緣。」邊人皆感泣。

『太平広記』 玄宗深憫之、遂以嫁得詩人。仍謂

之曰、「我與汝結今生緣。」邊人皆感泣。

『唐詩紀事』 上深憫之、遂以嫁得詩者。謂曰、

「吾與汝結今生緣。」邊人感泣。

實際、『醉翁談録』甲集卷一の「小説開闢」には、当時の講釈師が持つべき知識が述べられている。

夫小説者、雖爲末學、尤務多聞。非庸常淺識之流、有博覽該通之理。幼習『太平廣記』、長攻歷代史書。煙粉奇傳、素蘊胸次之間、風月須知、只在唇吻之上。『夷堅志』無有不覽、『瑤瑩集』所載皆通。動哨、中哨、莫非『東山笑林』、引倬、底倬、須還『綠窗新話』。(中略) 講歷代年載廢興、記歲月英雄文武。有靈怪、煙粉、傳奇、公案、兼樸刀、捍棒、妖術、神仙。自然使席上風生、不枉教坐間星拱。(後略)(夫れ小説なる者は、末学為りと雖も、尤も多聞に務むべきものなり。庸常淺識の流に非ず、博覽該通の理有り。幼きは『太平広記』を習ひ、長じては歴代の史書を攻む。煙粉奇伝、素より胸次の間に蘊み、風月須知、只だ唇吻の上に在り。『夷堅志』覽ざる有るは無く、『瑤瑩集』載する所皆通ず。動哨、中哨、『東山笑林』に非ざるは莫く、引倬、底倬、須らく『綠窓新話』に還るべし。(中略) 歴代年載廢興を講じ、歲月英雄文武を記す。靈怪、煙粉、伝奇、公案、兼ねて樸刀、捍棒、妖術、神仙有り。自然にして席上に風生じ、枉らならずして坐間に星拱らしむ。(後略)

『類説』 明皇憫之、遂以嫁得詩人。曰、「我與汝結今生緣。」
『古今事文類聚』 明皇深憫之、遂以嫁得詩者。謂之曰、「吾與爾結今生緣。」邊人感泣。
『全唐詩話』 上深憫之、遂以嫁得詩者。謂曰、「吾與汝結今生緣。」邊人感泣。
『詩話總龜』 明皇深憫之、遂以嫁得詩者。謂之曰、「吾與爾結今生緣。」
『吟窓雜録』 玄宗以宮人賜所賜詩兵士、邊人皆感泣。

③でも、セリフの部分がより詳しくなっている。また、このセリフは他の書物では玄宗のセリフとなっているが、『醉翁談録』では宮女が兵士に言ったセリフとなっている。宮女と兵士が契る表現(相與媾歡)も見られる。さらに、「盡忠守禦邊塞為之安寧」という結末についても、他の書物のものには見られない。

以上の四つの例から、次の四つの特徴を指摘することができる。第一に、他の書物よりも白話的な表現となっていること(①)。第二に、登場人物に関する情報がより具体的であること(②)。第三に、話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっていること(③)。第四に、情愛に関する描写が見られること(④)である。

こうした特徴、特に第一、第二、第三の特徴は、文言小説というよりも、語り物に近いものと考えられる。

ここでは、講釈師は様々な書物を読み、物語を熟知してはじめて講釈することができると説明されている。また、語り物にはいくつものジャンルがあったことも記されている。ここから、『酔翁談録』と語り物との間には、何らかの関係があると考えられており、『酔翁談録』は従来「宋代伝奇話本小説集」や¹¹⁾、「小説人の種本」とされてきた¹²⁾。しかし、そうした『酔翁談録』と語り物との関係について、本文の描写から具体的に考察した研究は、管見の及ぶ限り見られない。そこで、これら『酔翁談録』の語り物的ともいえるべき要素を具体的に検証すべく、以下、他の作品についても例を挙げて見て行きたい¹³⁾。

二 『酔翁談録』と話本小説の描写の特徴

(1) 白話的な表現

まずは、第一の特徴である「他の書物よりも白話的な表現となっている」ものを取り上げて確認して行きたい。

① 『酔翁談録』丙集卷二「耆卿譏張生恋妓」

柳戲謂張生曰、「前略」鐘離笑謂采和曰、『你道洞賓肚中有仙姑、你不知仙姑肚裏更有一人。』張生悟柳之咨、攜柳而出。（柳戲れて張生に謂ひて曰く、「前略」鐘離笑ひて采和に謂ひて曰く、『你洞賓の肚中に仙姑有りと道ふも、你

仙姑の肚裏に更に一人有るを知らず』と。」張生柳の咨きを悟り、柳を携へて出づ。）

② 『酔翁談録』丙集卷二「三妓挾歧卿作詞」

（安安）顧問柳曰、「得非填詞。」柳曰、「正被你兩姐姐所苦、令我作詞。」（安安）顧みて柳に問ひて曰く、「填詞するに非ざるを得んや」と。柳曰く、「正に你的兩姐姐の苦しむる所と被り、我をして詞を作らしむ」と。）

③ 『酔翁談録』己集卷二「薛昭娶雲容為妻」

有田山叟者、見昭有道骨、贈藥一粒曰、「東去不獨逃難、兼獲美麗仙女。」（田山叟なる者有り、昭の道骨有るを見、藥一粒を贈りて曰く、「東に去らば独り逃難するのみならず、兼ねて美麗の仙女を獲」と。）

④ 『酔翁談録』壬集卷一「紅綃密約張生負李氏娘」

女子執手而言、「非我兩個情堅、乃天助我。公方大醉困睡、我得乘便而來。」（女子 手を執りて言ふ、「我兩個の情の堅きに非ず、乃ち天の我を助くるなり。公方に大いに酔ひて困睡するに、我便に乗じて来るを得」と。）

傍線を施した箇所は、白話的な傾向が強いと判断でき

る箇所である。例えば、①の「肚裏」は、『朱子語類』や他の白話小説の作品に多く見られるが、文言の作品には少ない。同じように、②での「正被……所……」の文型は、白話作品でよく用いられるものである。③の「兼獲美麗仙女」は、『太平広記』や『類説』などの書物では「兼獲美姝」となっている。白話の作品では、「美姝」という表現がほとんど用いられず、「美麗」「仙女」がよく見られる。したがって、「兼獲美姝」よりも「兼獲美麗仙女」のほうがより白話的な表現であると判断できる。④の「我兩個」も非常に白話的な表現である¹⁴⁾。こうした、基本的には文言で書かれた文章の中に白話的な表現が散見するというのは、話本の特徴のひとつでもある¹⁵⁾。例えば敦煌変文にも同様の例が見られる。

⑤ 『敦煌変文集』「壽山遠公話」

於是相公聞語、轉更悲啼、伏願相公慈悲、與說宿生因果。公遠曰、「相公前世做一個商人、他家白庄也是一個商人、相公遂於白庄邊借錢五百貫文。是時貧道作保、後乃相公身亡、貧道欲擬填還、不幸亦死。（後略）」（是に於ひて相公 語を聞き、轉た更に悲啼し、伏して相公の慈悲を願ひ、与に宿生因果を説く。公遠曰く、「相公 前世 一個の商人を做し、他家の白庄も也た是れ一個の商人なり、相公 遂に白庄の辺に錢を借ること五百貫文。是の時 貧道 保を作せば、後 乃ち相公 身亡する

に、貧道 填還せんと欲擬し、不幸にして亦た死す。（後略）」と。）

⑥ 『敦煌変文集』「大唐三藏取經詩話」

（法師）問猴行者曰、「汝年幾歲。」行者答曰、「九度見黃河清。」法師不覺失笑、大生怪疑、遂曰、「汝年尚少、何得妄語。」行者曰、「我年紀小、歷過世代萬千、知得法師前生去西天取經、途中遇害。（後略）」（法師）猴行者に問ひて曰く、「汝年幾歲か」と。行者 答へて曰く、「九度 黄河の清きを見る」と。法師 覺へず失笑し、大いに怪疑を生じ、遂に曰く、「汝年尚ほ少し、何ぞ妄語するを得るならんや」と。行者曰く、「我れ年紀小なるも、世代万千を歴過し、法師の前生に西天に去りて經を取り、途中に害に遇ふを知り得たり。（後略）」と。）

⑤の「也是」は、白話的な傾向が強い言葉である。特に「做一個……」、「也是一个……」という文型は、文言の作品ではほとんど見られない。⑥の「年紀小」も、元雜劇や小説などの白話作品に多く見られる表現である。ここから、白話的な表現が多く見られるという傾向は、語り物に関する作品の特徴の一つだということがわかる。

(2) 人物に関する情報

『醉翁談録』所収の作品の中には、登場人物の情報を補充する例が幾つか見られる。

⑦ 『醉翁談録』己集卷二「趙旭得青童君為妻」
天水趙旭、字子明。(天水の趙旭、字は子明。)
『太平広記』卷六十五引『通幽記』
天水趙旭。(天水の趙旭。)

⑧ 『醉翁談録』己集卷二「封陟不從仙姝命」
封陟、字少登。(封陟、字は少登。)
『類説』卷三十二引『伝奇』
封陟(封陟)、(後略)¹⁶⁾

⑨ 『醉翁談録』癸集卷一「李亜仙不負鄭元和」
李娃、長安娼女也、字亜仙、舊名一枝花。(李娃、
長安の娼女なり、字は亜仙、旧名は一枝花なり。)
『類説』卷二十八引『異聞集』
李娃、長安倡女也。(李娃、長安の倡女なり。)

⑩ 『醉翁談録』癸集卷一「李亜仙不負鄭元和」
有榮陽鄭生、字元和者。(榮陽の鄭生、字は元
なる者有り。)
『類説』卷二十八引『異聞集』

『太平御覧』卷四一引『孝子図』
前漢董永、千乘人。少失母、獨養父。(前漢の董
永、千乘の人なり。少くして母を失ひ、独り父を
養ふ。)

『太平広記』に収録されたものには、董永に関する情
報がほとんど提示されておらず、『太平御覧』には、
董永が千乗の人であること、母が亡くなり一人で父を
扶養していたことが紹介されているだけである。それ
らに比べると、『清平山堂話本』の記述がいかに詳細
であるかがよくわかる。また、『醉翁談録』と比べると、『清平山堂話本』などの話本小説集は、人物に関
する情報がさらに詳しくなっていることが確認でき
る。

⑬ 『清平山堂話本』収「柳耆卿詩酒玩江樓記」
當時是宋神宗朝間、東京有一才子、天下聞名、姓
柳、雙名耆卿、排行第七、人稱柳七官人。(当時
是れ宋神宗朝間、東京に一才子有り、天下に名
聞こゆ、姓は柳、双名は耆卿、排行は第七、人
柳七官人と称す。)
『醉翁談録』丙集卷二「柳屯田耆卿」
柳耆卿、名永、建州崇安人也。(柳耆卿、名は永、
建州崇安の人なり。)

榮陽一公子。(榮陽の一公子。)

この四例はいずれも、『醉翁談録』においては、字が
記され、人物に関する情報が補充されている。これも
語り物の特徴の一つだと考える。登場人物に関する情
報を提示するのは小説として必要な条件であるが、話
本では人物に関する情報がより詳しくなるといふ傾向
がある。例えば、

⑪ 『清平山堂話本』収「董仲舒遇仙伝」
話說東漢中和年間、去至淮安府丹陽縣董槐村、有
一人、姓董名永、字延平、年二十五歲。少習詩書、
幼喪母親、只有父親、年六十歲餘。(話說東
漢の中和年間、去りて淮安府丹陽縣の董槐村に至
るに、一人有り、姓は董名は永、字は延平、年
は二十五歳なり。少くして詩書を習ひ、幼くして
母親を喪ひ、只だ父親の、年六十歳余りなる有
り。)

この「董仲舒遇仙伝」の本事は『太平広記』と『太平
御覧』にも収録されている。

⑫ 『太平広記』卷五九引『搜神記』
董永父亡。無以葬。(董永の父亡す。以て葬る
もの無し。)

⑭ 『熊龍峰小説四種』収「張生彩鸞燈伝」
且説在京一個貴公子、姓張名生、年方十八、生的
十分聰俊、未娶妻室。(且つ説く京に在りて一
個の貴公子の、姓は張名は生、年方に十八なる
あり、生的十分聰俊にして、未だ妻室を娶ら
ず。)

『醉翁談録』壬集卷一「紅綃密約張生負李氏娘」
京師貴官子張生。(京師の貴官子張生。)

一方、語り物との関係が薄い書物には、この傾向が見
られない。例えば、先に挙げた⑧⑨⑩の話は、『醉翁
談録』、『類説』いずれも『太平広記』に収められる
文との間に異同が見られるが、『類説』には、『醉翁
談録』のような人物に関する詳しい情報が見られない。
また、五代の杜光庭の『神仙感遇伝』は、前代の物語
を改作して編集したものだ、この中に収録される物
語を本事と比べると、人物に関する情報を補充した箇
所はほとんどない。

⑮ 『神仙感遇伝』卷二「裴沈從伯」
裴沈、仕爲同州司馬。(裴沈、仕へて同州の司馬と
爲る。)
『酉陽雜俎』前集卷二
同州司馬裴沈。(同州の司馬裴沈。)

⑩ 『神仙感遇伝』巻四「鄭又玄」

鄭又玄者、名家子。(鄭又玄なる者は、名家の子なり。)

『宣室志』巻九

蔡陽鄭又玄、名家子也。(蔡陽の鄭又玄、名家の子なり。)

この二話は、他の箇所では大きな変化が見られるが、人物に関する情報はほとんど変化していない。¹⁷⁾つまり、人物に関する情報を補充することは、語り物の一つの特徴だと考えられるのである。そして、語り物の性質が強くなればなるほど、人物に関する情報はより詳しくなる傾向が認められる。

(3) 物語の結末

「話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっている」という特徴についても、複数の例がある。例えば、

⑪ 『醉翁談録』乙集巻二「金陵真氏有詩才」

灌夫覽詩凄感、遂再與之偕老焉。(灌夫 詩を覽て凄感し、遂に再び之と偕老するなり。)

『類説』巻四十一引『雲溪友議』

灌夫覽詩凄感、遂爲夫婦如初。(灌夫 詩を覽て凄感し、遂に夫婦と爲りて初めの如し。)

「霍去病至……自刎而死」の部分に比べ、結末にあたる「如此一個將軍……皆李廣之後也」には、白話的な表現が用いられているが、この結末の部分には、李広が自殺した後のこと、および李広の子孫の事績が述べられており、やはり物語としてのオチがついた形になっている。こうしたことから、結末を補充し、オチをつけることも、語り物の大きな特徴の一つであると考えられる。

以上の考察から、『醉翁談録』の描写の傾向、すなわち「(1) 他の書物よりも白話的な表現となっている」「(2) 登場人物に関する情報がより具体的である」「(3) 話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっている」といった傾向は、話本の特徴と共通するものであることが確認できた。従来指摘されていたように、『醉翁談録』が語り物と関係のある書物であることが、描写の特徴を通して具体的に明らかにできたのである。先述したように、小松氏は、『醉翁談録』が会話を豊富にすることにによってより鮮明な人物像を作り上げていることを指摘されたが、それも『醉翁談録』が語り物的傾向の強い書物であったからだと考えられよう。

三 『醉翁談録』における情愛に関する描写

以上の考察により、『醉翁談録』が語り物の特徴を

『類説』では「遂爲夫婦如初」とするが、『醉翁談録』では「遂再與之偕老焉」と夫婦が一生添い遂げたことになつてと言えよう。同じ傾向は、やはり『清平山堂話本』などの話本集でも確認できる。

⑫ 『清平山堂話本』収「漢李広世号飛將軍」

霍去病至、曰、「朝廷要斬汝首、以正慢功之罪。」霍去病隨衛青還國。廣思、「空歸人世、一生不遇、幾遭黜逐、萬代笑恥。」帳中拔劍、自刎而死。如此一個將軍、化作南柯一夢。後來、李敢、李禹刺霍去病。朝廷命霍去病子霍光爲勸官。見李氏子孫孫不絕、必世世報讎、遂解釋其事。李氏子、李陵、皆李廣之後也。(霍去病 至りて曰く、「朝廷汝の首を斬り、以て功を慢るの罪を正さんと要す」と。霍去病 衛青に隨ひて国に還る。広 思ふに、「空しく人世に歸し、一生不遇にして、幾も黜逐に遭ひ、万代 笑恥せらる」と。帳中に劍を抜き、自刎して死す。此の如くにして 一個の將軍、化して南柯一夢と作る。後來、李敢、李禹 霍去病を刺す。朝廷 霍去病の子の霍光に命じて勸官^た爲らしむ。李氏 子孫孫 絶へず、必ず世世 報讎するを見て、遂に其の事を解釈す。李氏子、李陵、皆李広の後なり。)

備えていることが具体的に確認できた。しかし、「語り物」と言っても、『醉翁談録』は具体的にどのような内容の物語を収録した書物なのだろうか。

『醉翁談録』各巻の題目を確認してみると「表」参照)「煙粉歎合」「婦人題詠」「閨房賢淑」「重円故事」など、女性に関わる題目、あるいは男女の情愛を想像させる題目が多いことがわかる。また、「宝窓妙語」、「花判公案」など、題目からはよくわからないものも、実際は男女間の情愛に関するもの内容がほとんどである¹⁸⁾。先に挙げた『醉翁談録』乙集巻二「唐宮人製短袍詩」の中の、「情愛に関する描写が見られる」という特徴も、まさにこうした『醉翁談録』の傾向を表す例の一つである。この点について、以下の例を見てみたい。

⑬ 『醉翁談録』辛集巻一「劉阮遇仙女於天台山」

行夫婦之道、極人間之歡。(夫婦の道を行ひ、人間の歡を極む。)

『蒙求集注』

行夫婦之道。(夫婦の道を行ふ。)

⑭ 『醉翁談録』己集巻二「趙旭得青童君為妻」

子明喜悅、不知所裁。於是三人共同衾枕。(子明 喜悅し、裁する所を知らず。是に於いて 三人 共同に衾枕す。)

『太平広記』卷六十五引『通幽記』

旭喜悅、不知所裁、既同歡洽。(旭喜悅し、裁する所を知らず、既に同に歡洽す。)

⑲の「行夫婦之道極人間之歡」は、同話が収録された『蒙求集注』では「行夫婦之道」とし、「極人間之歡」の五字は『醉翁談録』にしか見られない。⑳の「於是三人共同衾枕」も、『太平広記』では「既同歡洽」とし、『醉翁談録』の描写の方がより大胆になっている。こうした例から、他の書物に収録された同話に比べると、『醉翁談録』所収の話には情愛に関する描写が多く、詳しくなっていることが指摘できる。『醉翁談録』には、以下のような例も見られる。

⑳ 『醉翁談録』乙集卷一「静女私通陳彦臣」

至一更許、挨門而入。歡意相通。自天而下、事諧雲雨、何異神仙。(一更許りに至るに、門を挨して入る。歡意相ひ通ず。天自りして下り、事諧ふこと雲雨のごときは、何ぞ神仙と異ならん。)

㉑ 『醉翁談録』乙集卷一「静女私通陳彦臣」

攜手相同歸、雖生死不顧也。媾歡畢、静女索筆、題詩於寢房之右云云。(手を携へて相ひ同に帰り、生死と雖も顧りみざるなり。媾歡畢り、静女筆を索め、詩を寢房の右に題して云云。)

城登山觀之。須臾、見一神女自空而降招接、引趙子明各乘一鶴、白日昇天。異哉。(青童君)詩を吟じて去る。詩に曰く、「君と宿世に仙縁有り、衾枕し交歡するは豈に偶然ならんや、十載期を為す君記取せよ、洞明山上鶴天を沖く」と。趙子明酬ゆるに詩を以て曰く、「凡庸弱質なるも天仙を感じ、歡合交情すること僅か一年、十載期を為して専ら在念し、歴歴たる枕前の言を忘るること莫し」と。果たして後十三年、益州に於いて子明を見るに、形容短小にして、八九歳の小児の模様の如く、市に行歌して曰く、「塵縁尽きて仙縁来り、清風冷然として我が懐に入る。青童仙君事已に諧ひ、洞明山上瑞雲埋む。九月九日黄花開き、仙人我を招きて天階に上らしむ、凌空双鶴何ぞ快なるかな」と。子明此の如く階上に在りて或ひは出で或ひは没し、兩月余りを経、人其の異なるを知る。九月九日に至り、只だ洞明山の上、仙霞飄飄として、仙樂清響し、双鶴の朝自り午に至るまで、山頂の上を回翔するを見る。益州城を傾けて山に登りて之を觀る。須臾にして、一神女の空自り降りて招接し、趙子明を引きて各一鶴に乗り、白日に昇天するを見る。異なるかな。)

『太平広記』卷六十五引『通幽記』

旭方知失奴、而悲不自勝。女曰、「甚知君心、然

⑳ 『醉翁談録』壬集卷二「紅綃密約張生負李氏娘」
於是擁生去就枕、如魚得水、極盡歡情。(是に於いて生を擁して去きて枕に就き、魚の水を得るが如く、歡情を極め盡す。)

この三例には、「事諧雲雨」「媾歡畢」「如魚得水極盡歡情」などの表現が見られ、男女の交わりがはっきりと記されている。『醉翁談録』が他の書物以上に、男女の情愛を重視していることが窺える。
男女の情愛を重視するという点については、結末の部分にも現れている。

㉒ 『醉翁談録』己集卷二「趙旭得青童君為妻」

(青童君)吟詩而去。詩曰、「與君宿世有仙縁、衾枕交歡豈偶然、十載爲期君記取、洞明山上鶴冲天。」趙子明酬以詩曰、「凡庸弱質感天仙、歡合交情僅一年、十載爲期專在念、莫忘歴歴枕前言。」果後十三年、於益州見子明、形容短小、如八九歲小兒模樣、行歌於市曰、「塵縁盡兮仙縁來、清風冷然入我懷。青童仙君事已諧、洞明山上瑞雲埋。九月九日黄花開、仙人招我上天階、凌空雙鶴何快哉。」子明如此在階上或出或沒、經兩月餘、人知其異。至九月九日、只見洞明山上、仙霞飄飄、仙樂清響、雙鶴自朝至午、回翔於山頂之上。益州傾

事亦不合長與君往來、運數然耳。自此訣別、努力修持、當速相見也。其大要以心死可以身生、保精可以致神。」遂留『仙樞龍席隱訣』五篇、内多隱語、亦指驗於旭、旭洞曉之。將且而去、旭悲哽執手。女曰、「悲自何來。」旭曰、「在心所牽耳。」女曰、「身為心牽、鬼道至矣。」言訖、竦身而上、忽不見、室中帘帷器具悉無矣。旭恍然自失。其後寤寐、仿佛猶尚往來。旭大歷初、猶在淮泗、或有人於益州見之、短小美容範、多在市肆商貨、故時人莫得辨也。『仙樞遙』五篇、篇後有旭紀事、詞甚詳悉。(旭方に奴を失ふを知りて、悲しみて自ら勝へず。女曰く、「甚だ君の心を知る、然るに事亦た長く君と往來するに合はず、運數然るのみ。此れ自り訣別し、努力して修持せば、當に速やかに相見すべきなり。其の大意は、以て心死せしめば以て身生くべく、精を保てば以て神を致すべし」と。遂に『仙樞龍席隱訣』五篇を留むるに、内に隱語多く、亦た旭に指驗すれば、旭之に洞曉す。將に且にして去らんとするに、旭悲哽して手を執る。女曰く、「悲、何に自りて来たらん」と。旭曰く、「心に在りて牽く所あるのみ」と。女曰く、「身心の牽くところと為れば、鬼道至るなり」と。言ひ訖はるに、身を竦ひて上り、忽ち見へず、室中の帘帷器具悉く無きなり。旭恍然として自失す。其の後寤寐するに、猶尚往來するを仿佛す。旭大歴の初め、猶ほ淮泗

に在り、或ひは人有りて益州に之を見るも、短小にして容範美しく、多く市肆に在りて貨を商ひ、故に時人弁くを得る莫きなり。『仙樞遙』五篇、篇後に旭の紀事有り、詞甚だ詳悉たり。」

この話は、趙旭という男性が青童君という仙女と夫婦になって一緒に暮らしたが、財物を使用人に盗まれ、二人の関係が明るみにでて、やむなく青童君と別れたという内容である。結末の部分を見てみると、『太平広記』では、趙旭が神仙の術を修得して仙人になったことが記されているだけであるが、『酔翁談録』の方では、趙旭は青童君と詩のやりとりをして再会を約束し、一緒に昇天することになる。『太平広記』所収の物語が、典籍によつて修練した結果神仙になるという点を強調しているのに対し、『酔翁談録』の方は、人間の男性が修行を積むことによつて、仙女と共に昇天するという大団円の物語になっているのである。同様の例をもう一つ見てみたい。

⑤ 『酔翁談録』壬集卷二「紅綃密約張生負李氏娘」
彩雲氣噎、奔告李氏。李氏與彩雲俱至、視之果然。李氏突至階下、越英驚問。李氏指生曰、「此我夫也。」遂罵張生、「辜恩負義、停妻娶妻、既爲士人、豈不識法。」越英當時謂生曰、「君既有妻、復求奴姻、是君負心之過。」於是三人共爭、以彩

南園に遊ばしむるに因りて、李氏の墓を面見す。彩雲備に其の実を達す。此に因りて梁公に訟へ、遂に張生と絶つ。張生怒りに乗じて梁を殺す。棄市せらる。」

『姫侍類偶』では、張生の浮気に気づいた李氏が血を吐いて死んだ後、浮気相手の梁越英が張生と絶交し、官府に訴えたところ、張生は怒って越英を殺し、極刑を言い渡されたことになっている。ところが『酔翁談録』に収録されたものでは、李氏が張生の浮気に気づいて包公に訴えたところ、包公は李氏を正室とし、越英を妾にするとの判決を下すことになっている。誰一人命を落とすことなく、悲劇の物語が大団円へと完全に變化しているのである。

これらの例からは、『酔翁談録』が男女間の情を重視していること、それも大団円を迎える形に変更される傾向があることが具体的に窺える。以上の考察により、『酔翁談録』という書物は、主題の選択の面だけではなく、描写の面においても、「男女の情愛」を重視するものであることがわかる。

終わりに

『酔翁談録』がどのような書物なのかという問題について、先行研究では「話本小説集」であるなどの指摘があったが^[21]、ほとんどが『酔翁談録』の序や各

雲為證、遂告於包公待制之廳、各各供狀。果是張資之負心、□□□□廳監。張資責娶李氏為正室、□□□□偏室。事見『太平廣記』。(彩雲 氣噎し、奔りて李氏に告ぐ。李氏 彩雲と俱に至り、之を視るに果然たり。李氏 突かに階下に至るに、越英 驚きて問ふ。李氏 生を指して曰く、「此我が夫なり」と。遂に張生を罵りて、「恩に辜き義に負き、妻を停むるに妻を娶り、既に士人為れば、豈に法を識らざらん」と。越英 當時に生に謂ひて曰く、「君 既に妻有るに、復た奴に姻を求むるは、是れ君の負心の過ちなり」と。是に於いて三人共に争ひ、彩雲を以て證と為し、遂に包公待制の庁に告げ、各各 状を供ふ。果たして是れ張資の負心、□□□□庁監。張資 責められて李氏を娶りて正室と為し、□□□□偏室。事『太平広記』に見ゆ。)^[20]

『姫侍類偶』

李氏飲氣嘔血死。彩雲大慟、葬於邵南。彩雲丐食自給、守墓三年、不發祀禮。其越英因張生命妓遊南園、卬見李氏墓。彩雲備達其實。因此梁訟於公、遂與張生絶。張生乘怒殺梁。棄市。(李氏 氣を飲み血を嘔きて死す。彩雲 大いに慟き、邵南に葬る。彩雲 食を丐ひて自給し、墓を守ること三年、祀礼を發せず。其の越英 張生の妓に命じて

卷の題目のみから導き出された結論であり、本文の描写や内容に対する具体的な考察は行われてこなかった。そこで、本稿では『酔翁談録』に収められたすべての話を取り上げ、同話と比較し、本文の描写の特徴を考察することによって、『酔翁談録』の性質を考えてみた。その結果、「(一) 他の書物よりも白話的な表現となっていること」、「(二) 登場人物に関する情報がより具体的であること」、「(三) 話の結末に違いが見られ、記述がより詳しく、表現が豊かになっていること」、「(四) 情愛に関する描写が見られること」という四つの描写の特徴を明らかにした。この内、「(一) (二) (三) の特徴は、語り物に見られる特徴と共通することから、『酔翁談録』が語り物と深い関係にあることを具体的に指摘した。(四) の特徴からは、『酔翁談録』が男女の情愛を重視しているということが具体的に明らかとなり、語り物の中でも、「煙粉」や「伝奇」といったジャンルに深く関わるものであったことが窺えた^[22]。

しかし、語り物と深い関係にあるとはいえず、『酔翁談録』は実際に講釈師の種本として編まれたものなのだろうか。この問題について、胡士瑩氏は『酔翁談録』所収の話は、講釈師の底本である可能性がある^[23]と指摘し^[23]、程毅中も「羅燁によつて編纂された『酔翁談録』は講釈師の参考書である」と指摘する^[24]。一方で、最初から読み物として作られたものだという意見もある^[25]。この問題に関しては、編者羅燁につ

いて、また『醉翁談録』という書名についても、考察を加える必要がある。今後の課題としたい。

注

- [1] 羅燁の『醉翁談録』に関する記載は、明以降の書物には確認できないため、明以降に散逸したと思われる。
- [2] 一九四一年、文求堂はこの版本を影印出版し、一九五七年、上海の古典文学出版社は文求堂の影印本を底本として排印本を出版した。本稿では文求堂の影印本を使用し、誤字、脱字が疑われる箇所等については、排印本を参照した。
- [3] 『醒世恒言』の本事に関する情報は、小川陽一『三言二拍本事論考集成』（新典社、一九八一年）を参考にした。
- [4] 『百川書志』や『八千卷樓書目』などの目録書の中にも『醉翁談録』に関する記載があるが、これは金盈之が編纂した同名の書物を指し、羅燁の作品ではない。さらに、南宋淳祐壬寅年間に完成した『百菊集譜』巻六「黄白菊」の注に「胡侍郎『二色蓮』、詩見『醉翁談録』。」とある。しかし、羅燁の『醉翁談録』の中にも、金盈之の『醉翁談録』の中にも、この詩は収録されていない。したがって、いずれの『醉翁談録』に「黄白菊」が収録されたのか、現段階では確定できない。
- [5] ここ言う「同話」とは、『醉翁談録』所収の話と登場人物や地名などが同じで、文字上の異同があるだけの
- 已に過ぐるなり、後身の縁を結取す」と。兵士乃ち此の詩を以て主帥に白す。帥之を玄宗に進む。玄宗命じて詩を以て偏く六宮に示さしめ、曰く、『此の詩は是れ誰か作れる。作者有らば、之を言ひて隠るる勿かれ、吾汝を罪せず』と。一宮女何氏有り、自ら言ふ、『某製つ。万罪、万死』と。玄宗深く之を憫れみ、乃ち何氏を以て詩を得るの兵士に嫁がしむ。礼を成すの夕、宮人仍ち兵士に謂ひて曰く、『我、汝と今生の縁を結ぶ、後身の縁に非ざるなり』と。相ひ互に媾歛す。此由り、辺人聖恩を感念せざるは無く、忠を尽くして守禦し、辺塞之が為に安寧なり。」
- [10] 影印本には「講」に作るが、排印本を参照の上「講」の誤写と判断した。
- [11] 寧稼雨『中国文言小説総目提要』（齐鲁書社、一九九六年）。
- [12] 大塚秀高「話本と『通俗類書』——宋代小説話本へのアプローチ——」（『日本中国学会報』第二十八集、一九七六年）。
- [13] 胡士瑩氏は『話本小説概論』（中華書局、一九八〇年）の中で、「唐代的『説話』名目、以記載闕略、已無從考知。（中略）在敦煌石室裏發現の文献中、可以算作『話本』的、主要有『壽山遠公話』、『韓擒虎画本』、『師師漫語話』等三種、前兩種首尾完整、顯示出話本的初期風貌。」と指摘し、また「現存的宋人話本、除極少数是留伝下来单行本外、大多数皆散見於明人匯輯的『京本通俗小説』、『清平山堂話本』、『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』

話を指し、「類話」とは、人名や地名などは異なるが、物語の展開が似ている話を指す。

- [6] 先行研究については、譚正璧『醉翁談録』所録宋人説話名目考（『話本与古劇』、古典文学出版社、一九五六年）、胡士瑩『醉翁談録』著録的宋人「説話」名目（『話本小説概論』、商務印書館、二〇一一年）董尚徳「論『醉翁談録』的性質与旨趣」（『學術研究』、二〇〇一年第三期）、湯華泉「羅燁『醉翁談録』的成書年代及其宋代詩文考察」（『新国学』第八輯、二〇〇六年）、凌郁之「醉翁談録」「舌耕敘引」発微」（『中国典籍与文化』、二〇〇六年第四期）、孟昭連「醉翁談録新解」（『南京師範大学学报（社会科学版）』、二〇一六年第一期）などがある。
- [7] 小松建男「『封陟』の改作——『太平広記』から『醉翁談録』へ——」（『中国文化（漢文学会報）』、一九九一年第一期）。
- [8] 使用するテキストの問題は大変重要であるが、本稿では現在容易に見られる版本の中で、『醉翁談録』のテキストと比較的近い時代に作られたものを使用して比較を行った。
- [9] 以下に書き下し文を記す。「唐の開元中、辺塞の軍卒の寒衣を頒賜す。玄宗乃ち六宮の美人に命じて裁製せしむ。一兵士有り、短袍の中に於いて詩一首を得、云ふ、『詩に曰く』『沙場征戍の客、寒苦にして若ぞ眠らん。戦袍経手して作るも、阿誰の辺に落つるを知らん。意を蓄へて多く線を添へ、情を含みて更に綿を著く。今生
- 等書中。」と指摘し、これらの作品を取り上げて分析した。しかし、『京本通俗小説』は後人の偽作と疑われ、『古今小説』、『警世通言』、『醒世恒言』も馮夢龍によって加筆された部分が多いので、ここでは主に「壽山遠公話」、「韓擒虎画本」、「師師漫語話」（王重民等編『敦煌变文集』、人民文学出版社、一九五七年）、「大唐三藏取経詩話」（李時人、蔡鏡浩校注『大唐三藏取経詩話校注』、中華書局、一九九七年）、「清平山堂話本」（程毅中校注『清平山堂話本校注』、中華書局、二〇一二年）、「熊龍峰四種小説」（上海古籍出版社、一九八七年）を取り上げて考察する。
- [14] 本稿において「その表現が白話的か否か」という問題については、「北京大学漢語語言学研究中心語料庫」や「中国基本古籍庫」等のデータベースを用いて調査を行い、白話小説に多く見られるかどうかで判断した。しかし、現段階では客観的な根拠を示す方法を見出せていない。課題としたい。
- [15] 「話本」とは、一般的に講釈師の底本を指す。一方、文人が講釈の形式を做って作った話は、「擬話本」と称された。しかし、「話本」と「擬話本」を厳密に区別することは難しく、本論の中心でもないので、ここでは「語り物」の体裁を取るものを「話本」と呼ぶ。『清平山堂話本』などの話本集の中には、白話で書かれたものだけでなく、文言で書かれたものも多く存在している。
- [16] 小松氏の論文（注〔7〕）によると、「封陟」の話は『太平広記』に初めて見られる。ただし本稿では、『醉翁談

録』と本文が最も近い書物を用いて比較を行った。他の例も、この基準に従って比較を行った。

[17] 『神仙感遇伝』所収の話と本事の比較については、屋敷信晴「杜光庭『神仙感遇伝』について」（『山本昭教授退休記念中国学論集』、白帝社、二〇〇〇年）を参照した。

[18] 『醉翁談録』甲集巻一「舌耕序引」に「吟成風月三千巻、散与知音論古今」とある。これも、『醉翁談録』が「男女の情愛」に関わる書物であることを物語っている。李剣国氏もここを根拠として、『醉翁談録』は「専采風月故事」の書であると指摘し、「李娃伝」などの伝奇故事の概要を紹介する（李剣国『宋代志怪伝奇叙録』、南开大学出版社、一九九七年）。

[19] 影印本には「枕」字が見られないが、排印本を参照の上補った。

[20] 『醉翁談録』壬集巻二「紅綃密約張生負李氏娘」の末尾に「事見『太平広記』」とあるが、この話は『太平広記』に見られない。包待制（包拯、宋仁宗時代の人）が登場していることから、『太平広記』編纂以降のものであると考える。

[21] 注「[11]」「[12]」を参照。

[22] 講釈のジャンルについては、各書物によって記載が異なるが、『醉翁談録』では、講釈は「靈怪」「煙粉」「伝奇」「公案」「樸刀」「捍棒」「妖術」「神仙」などのジャンルに分けられている。

[23] 胡士瑩『話本小说概論』（商務印書館、二〇一一年）

に「『醉翁談録』所収」這些小説、疑是備作説話人講說的藍本。」とある。

[24] 程毅中『宋元小説研究』（江蘇古籍出版社、一九九九年）に「大概在宋末或者元初、羅燁編了一本『醉翁談録』、是一部説話人的參考書。」とある。

[25] 孟昭連「『醉翁談録』新解」（『南京師範大学学报（社会科学版）』、二〇〇六年第一期）に「文言小説被説話人用作講故事的『底本』是正常的、也是必然的。但若說專為説話人編写『底本』、則大可懷疑。（中略）閱讀文言故事甚至正史著作、对文化水平不高的説話芸人、就要困難一些、因為中間要有一個語体轉換的問題。（中略）『醉翁談録』以下各卷所載文言作品、並非專為説話人写的『底本』、而是用於案頭閱讀的風月故事『類編』。」とある。

【表】『醉翁談錄』所収の話に関する同話・類話一覽

卷数	篇名	同話・類話（以前）	同話・類話（以降）	備考
甲集卷二 私情公案	○張氏夜奔呂星哥	南宋・陳元靚『事林廣記』辛集下卷。		
乙集卷一 煙粉合歡	林叔茂私挈楚娘		△『宋詩記事』卷九十七引『彤管遺編』。明・馮夢龍『情史』卷八。	
	○靜女私通陳彥臣	▲南宋・皇都風月主人『綠窓新話』卷上引『聞見錄』。	清・揆叙『歷朝閨雅』卷九（「牛郎織女」詩）。明・陳耀文『花草粹編』卷二十一（「兜上鞋兒」詞）に「鄭雲娘『寄張生』」、「出『雲娘傳』」、「一作連氏倩女寄陳彥臣」とある。明・卓人月『古今詞統』卷六（「兜上鞋兒」曲、「武陵春」詞）に「雲娘又寄張生「兜上鞋兒曲」云：」、「此詞（武陵春）一作連倩女寄陳彥臣。」とある。△清・徐鉉（「兜上鞋兒」曲、「武陵春」詞）『詞苑叢談』卷八に「鄭又有寄張「兜上鞋兒」曲、云：」、「趙秋官妻、書岐陽郵亭『武陵春』云：此詞一作連倩女寄陳彥臣作。」とある。清・周銘『林下詞選』卷二「宋詞」（「兜上鞋兒」曲）に「雲娘有「兜上鞋兒」曲云：」とあり、卷三「宋詞」（「武陵春」詞）に「趙秋官妻『武陵春』書岐陽郵亭」、「一作連倩女寄陳彥臣」とある。	明・周朝俊「紅梅記」第三十四齣（「牛郎織女」詩）。
	○憲台王剛中花判	南宋・陳元靚『事林廣記』	『御選宋詩』卷七十五（竹簾詩）。清・鄭傑	

卷数	篇名	同話・類話（以前）	同話・類話（以降）	備考
		記』（鄭氏積誠堂刻本）辛集下卷。	『閩詩錄』丙集卷十八引『名媛璣囊』（竹簾詩）。清・王初桐『蠹史』卷五十九引『醒睡編』、明・倪倌『群談采余』卷四「明断」。明・徐撰『榕陰新檢』卷十五引『群談采余』。清・楮人樓『堅瓠集』二集卷二引『醒睡編』。清・鄭方坤『全閩詩話』卷八引『醒睡編』。『（民國）尤溪県志』卷之八。	
乙集卷二 婦人題詠	○唐宮人製短袍詩	△唐・孟榮『本事詩』卷一。『太平広記』卷一百六十六引『本事詩』。宋・陳庾行『吟窓雜錄』卷四十四。南宋・計有功『唐詩紀事』卷七十八。南宋・曾慥『類說』卷五十一引『本事詩』。南宋・祝穆『古今事文類聚』統集卷五。南宋・阮閱『詩話繪龜』。南宋・尤袤『全唐詩話』。	明・馮夢龍『情史類略』卷四。明・曹学佺『石倉歷代詩選』卷四十六、卷一百一十二。『全唐詩』卷七百九十七。『玉芝堂談薈』卷六。明・彭大翼『山堂肆考』卷四十。明・蔣一葵『堯山堂外紀』。明・宋岳『畫永編』下集。明・田芸蘅『詩女史』卷六。明・許自昌『捧腹編』卷五。清・陳維崧『陳檢討四六』卷十七。清・費經虞『雅倫』卷二十二。清・梁章鉅『稱謂錄』卷三十二。清・王初桐『蠹史』卷四十一。清・張潛『詩法醒言』卷九。	「双珠記」（明・毛晋『六十種曲』）。
	○金陵真氏有詩才	△唐・范攄『雲溪友議』卷上。『太平広記』二卷七十一引『雲溪友議』。南宋・魏慶之『詩	元・佚名『氏族大全』。明・陳耀文『天中記』卷十九引『唐宋遺史』。清・彭大翼『山堂肆考』卷九十五。明・曹学佺『石倉歷代詩選』卷一百一十三。明・焦周『焦氏說楛』卷六。明・	

丙集卷一 宝窓妙語		卷数	
因兄弟得成夫婦	黃季仲不挾貴易娶	篇名	○六歲女吟詩
○致妾不可不察		同話・類話（以前）	宋・陳宥行『吟窓雜錄』卷四十七。南宋・魏慶之『詩人玉屑』卷二十。南宋・洪邁『万首唐人絕句詩』卷第二十四。南宋・尤袤『全唐詩話』卷六。南宋・朱勝非『紺珠集』卷五。
△南宋・皇都風月主人『綠窓新話』引『聞見錄』。		同話・類話（以降）	類函』卷二百四十六。清・張豫章『四朝詩』元詩卷七十九。 元・楊士宏『唐音』卷十四。明・曹學佺『石倉歷代詩選』卷三十一。明・高棟『唐詩品彙』卷四十五。明・黃佐『広州人物伝』卷二十。明・蔣一葵『堯山堂外紀』卷二十三。明・陸時雍『唐詩鏡』卷八。明・田芸衡『詩女史』卷六。『全唐詩』卷七百九十九。清・蔣鳴珂『古今詩話探奇』卷上。清・揆叙『歷朝閨雅』卷六。清・李清『歷代不知姓名錄』卷四。清・李鐸『詩法易簡錄』卷十三。清・王初桐『奩史』卷四十四。
	明・馮夢龍『古今奇觀』卷二十八。明・馮夢龍『古今談概』卷三十六。明・馮夢龍『情史』卷二。清・褚人穫『堅瓠癸集』卷三引『暇弋篇』。	備考	

韓玉父尋夫題漢口鋪	姑蘇錢氏婦鄉壁記於道	吳氏寄夫歌	
			人玉屑』卷二十引『唐宋遺史』。南宋・曾慥『類說』卷四十一引『雲溪友議』。南宋・佚名『錦繡万花谷』。南宋・祝穆『古今事文類聚』。南宋・陳宥行『吟窓雜錄』。南宋・謝維新『事類備要』。南宋・紀有功『唐詩紀事』引『雲溪友議』。南宋・洪邁『万首唐人絕句詩』卷六十九。
			田芸衡『詩女史』卷七。『全唐詩』卷七百九十九。清・揆叙『歷朝閨雅』卷七。清・王初桐『奩史』卷二夫婦門二引『雲溪友議』。清・金埴『不下帶編』卷二。
			明・鄭琬『彤管遺編』。明・馮夢龍『情史』卷十四。△清・厲鶚『宋詩紀事』卷八十七引『彤管遺編』。清・揆叙『歷朝閨雅』卷一。清・張豫章『四朝詩』宋詩卷二十五。清・鄭方坤『全閩詩話』卷十引『情史』。清・厲鶚『玉臺書史』引『四朝詩集』。
			△『古今圖書集成』閩媛典第三百六十五卷閩恨部。
			△明・彭大翼『山堂肆考』卷九十四。明・馮夢龍『情史』卷二十四。明・徐伯齡『蟬精雋』卷十二引『詩話雋永』。△清・陳衍『元詩紀事』卷十七引『詩話雋永』。清・張英『淵鑑

戊集卷一 煙花品藻	翁元広詩二十八首	錯認古人詩句	○王次公借驢罵僧	○嘲人面似猿猴	○夫嘲妻青黑	婦人嫉妬	○嘲人請酒不醉	○嘲人不識羞	妻	○杜正倫譏任環怕	卷数	篇名	同話・類話(以前)	同話・類話(以降)	備考
			南宋・陳元靚『事林広記』(鄭氏積誠堂刻本) 辛集下卷。南宋・陳元靚『事林広記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林広記』(鄭氏積誠堂刻本) 辛集下卷。											

丁集卷二 嘲戲綺語	○嘲人好色	○德奴家燭有異香	○潘瓊兒家最繁盛	○島仙自小好詩名	○鄭生詩贈趙絳真	○諸妓期遇保唐寺	○序諸妓子母所目	○唐・孫榮『北里志』。南宋・金盈之『醉翁談錄』卷七・卷八。	○序平康巷陌諸曲	柳耆卿以詞答妓名朱玉	三妓挾妓卿作詞	耆卿譏張生恋妓	柳屯田耆卿	僧行因禍致福	丁集卷一 花衢記錄	丙集卷二 花衢實錄	卷数	篇名	同話・類話(以前)	同話・類話(以降)	備考										
																						丁集卷二 嘲戲綺語									

煙花詩集	己集卷一 煙粉歎合 引	梁意娘与李生詩曲 意娘与李生小帖 意娘復与李生二首 意娘復与李生批 意娘与李生相思歌 意娘与李生相思賦	○趙旭得青童君為妻 ○薛昭娶雲容為妻	△『太平広記』卷六十五引『通幽記』。南宋・曾慥『類說』卷三十二引「拾遺類総」。	明・馮夢龍『情史』卷三。△「梁意娘本伝」(『古今圖書集成』閩媛典第三百三十五卷「閩藻部」引『彤管遺編』)。清・周銘『林下詞選』卷三宋詞。清・王初桐『奩史』卷五十九事為門三引『彤管遺編』。清・厲鶚『宋詩紀事』卷九十七引『彤管遺編』(「蹤跡浮萍落五湖」詩)。明・陳耀文『花草粹編』卷九小令「寄李生」(「茶瓶兒」)。清・丁紹儀『聽秋聲館詞話』卷九(「茶瓶兒」)。清・沈辰垣『歷代詩餘』卷二十五「茶瓶兒」。清・厲鶚『宋詩紀事』卷九十七「述懷」(「蹤跡浮萍落五湖」)引『彤管遺編』。卷一百七に「梁意娘、梁蕭湖女、適李生。」とある。清・張豫章『四朝詩』宋詩卷七十五「述懷」(「蹤跡浮萍落五湖」)。	「火牛陣」(「一片白雲 青山外」詩)(清・李世忠『梨園集成』。明・周朝俊「紅梅記」(「人道海水深」詩)
己集卷二 遇仙奇会 妻	○趙旭得青童君為妻	△『太平広記』卷六十五引『通幽記』。南宋・曾慥『類說』卷三十二引「拾遺類総」。	明・陳耀文『天中記』卷三引『伝奇』。明・陸楫『古今說海』「薛昭伝」。明・王世貞『艷異編』卷三。『全唐詩』卷八百六十三。清・杜文瀾『古語彙』卷九十六引『太平広記』。清・王初桐『奩史』卷五引『煙粉靈怪』。(略)			

卷数	篇名	同話・類話(以前)	同話・類話(以降)	備考
	○郭翰感織女為妻	△『太平広記』卷六十八引『靈怪集』。宋・陸佃『增修埤雅広要』卷三十一引『神異録』。宋・葛勝仲『丹陽集』卷二十二。南宋・曾慥『類說』卷三十七引『神異經』。南宋・朱勝非『紺珠集』卷五引『神經』。南宋・佚名『錦繡万花谷』後集卷四引『墨莊冗録』。南宋・陳元靚『歲時広記』卷二十七引『墨莊冗録』。南宋・洪邁『万首唐人絶句詩』卷第二十二。南宋・謝維新『事類備要』前集卷十七引『墨莊冗録』。	元・佚名『氏族大全』卷二十一十八。元・陰時夫『韻府群玉』卷十二引『墨莊冗録』。元・趙道一『歷世眞仙體道通鑑』後集卷二引『神異記』。明・曹学佺『石倉歷代詩選』卷一百二十三「晚唐拾遺」。明・彭大翼『山堂肆考』卷十二引『墨莊冗録』。明・王世貞『艷異編』卷一。明・王昉『群書類編故事』卷二十一。明・夏樹芳『詞林海錯』卷十三引『神異經』。明・謝肇淛『五雜俎』卷一。『全唐詩』卷八百六十三。清・王初桐『奩史』卷九十七引『墨莊冗録』。『博文閣録』。清・翟灏『通俗編』卷二十五引『靈怪録』。(略)	
	○封陟不從仙妹命	△『太平広記』卷六十八引『伝奇』。廷珪『海録碎事』卷九下引『伝奇』。南宋・朱勝非『紺珠集』卷十一。南宋・曾慥『類說』卷三十二	元・佚名『氏族大全』卷一。元・陰時夫『韻府群玉』卷五。明・陸楫『古今說海』「少室仙妹伝」。明・王世貞『艷異編』卷二「少室仙妹伝」。明・謝肇淛『文海披沙』卷六。『全唐詩』卷八百六十三。(略)	南宋・周密『武林旧事』後武林旧事卷四に「封陟中和樂」とある。元・陶宗儀『南村輟耕録』南村輟耕録卷之二十六「諸雜砌」に「封陟」

卷數		篇名	
庚集卷二 花判公案	○大丞相判李淳娘 供狀	同話・類話（以前）	同話・類話（以降）
	○張魁以詞判妓狀	南宋・鄭樵『通志』卷一百八十五「列女傳」。	
	○判暨師奴從良狀	南宋・祝穆『事文類聚』前集卷四引「世說」。	
	○判娼妓為妻	同上。	
	○判妓執照狀	南宋・陳元靚『事林廣記』（和刻本）癸集。	
	○富沙守収附籍	南宋・陳元靚『事林廣記』（鄭氏積誠堂刻本）辛集下卷。南宋・陳元靚『事林廣記』（和刻本）癸集。	
	○判夫出改嫁狀	南宋・陳元靚『事林廣記』（鄭氏積誠堂刻本）辛集下卷。南宋・陳元靚『事林廣記』（和刻本）癸集。	
	○黃判院判戴氏論夫	南宋・陳元靚『事林廣記』（和刻本）癸集。	
	○子瞻判和尚遊娼	南宋・陳元靚『事林廣記』（和刻本）癸集。	▲明・西湖漁隱主人『歡喜冤家』。
			備考

卷數		篇名	
	○道韞才辨	類賦』卷六引『列仙傳』。南宋・鄭樵『通志』卷一百八十五。	元・佚名『群書通要』甲集卷四引「謝安傳」。明・陳耀文『天中記』卷十八引『晉書』。明・彭大翼『山堂肆考』卷五。明・田芸衛『詩女史』卷四。明・嚴衍『資治通鑑補』卷一百一十一。明・張元忭『萬曆』紹興府志』卷四十七。清・嵇曾筠『（雍正）浙江通志』卷二百九引『晉書』。（略）
		南朝宋・劉義慶『世說新語』卷上之上。△『晉書』卷九十六「列女傳」。『蒙求集注』。唐・白居易『白氏六帖事類集』卷一、卷六引「世說」。唐・韓鄂『歲華紀麗』卷四引「世說」。唐・陸龜蒙『小名錄』卷上。唐・歐陽詢『芸文類聚』卷二引「世說」。唐・徐堅『初學記』卷二引「世說」。宋・陳思『小字錄』引「世說」。宋・陳應行『吟窓雜錄』卷二十九。南宋・高似孫『（嘉定）刻錄』卷三。南宋・何士信『群英草堂詩餘』前集卷下引「世說」。南宋・佚名『錦繡万花谷』統集卷三十五引『晉史』。南宋・佚名『翰苑新書集』後集下卷五。	

辛集卷一 神仙嘉会	○柳毅伝書遇洞庭 水仙女	○判妓告行賽願	○判渡子不孝罪	○断人冒称進士	○判楚娘悔嫁村夫	○判和尚相打	○判僧奸情	▲南宋・皇都風月主人 『綠窓新話』。
南宋・陳元靚『事林廣記』(鄭氏積誠堂刻本)	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	南宋・陳元靚『事林廣記』(和刻本) 癸集。	
△『太平広記』卷四百二十引『異聞集』。南宋・曾慥『類說』卷二十八引『異聞集』。南	明・湯顯祖『虞初志』卷二。明・王世貞『艷異編』卷二。清・王初桐『畜史』卷七引「洞庭靈烟伝」。〈略〉							
	宋・陸佃『增修埤雅』卷四十一に「俞道婆、金陵人也。市油養為業。常隨衆三問琅邪、							

			卷数	篇名	同話・類話(以前)	同話・類話(以降)	備考
○劉阮遇仙女於天台山					宋・皇都風月主人『綠窓新話』。南宋・陳葆光『三洞群仙録』卷十二引『仙伝拾遺』。	金・王朋壽『類林雜説』卷十五。明・馮夢龍『情史』卷十九。元・佚名『氏族大全』卷十一十八。清・王初桐『畜史』卷九十七。〈略〉	以臨濟無位真人話示之。一日、聞丐者唱蓮華樂云、「不因柳毅伝書信、何縁得到洞庭湖。」とある。宋・釈贊寧『東坡先生物類相感志』卷五。南宋・周密『武林旧事』後武林旧事卷四に「柳毅大聖楽」とある。元・尚仲賢「柳毅伝書」。『柳毅伝』(明・晁璠『晁氏宝文堂書目』「子雜」、明・高儒『百川書志』卷五「伝記」)。黄説仲「龍綯」(明・呂天成『曲品』卷下)。許自昌「橘浦」(明・祁彪佳『遠山堂曲品』)。「柳毅洞庭龍女」(明・徐渭『南詞叙録』)。
					隋・杜公瞻『編珠』卷三引『列仙伝』。唐・釈道世『法苑珠林』卷第四十一引『幽明録』。△『太平広記』卷六十		「晋劉阮誤入桃花」(明・晁璠『晁氏宝文堂書目』「樂府」)。王子一「劉阮天台」(『元曲選』)。

	<p>○裴航遇雲英於藍橋</p>
<p>一引『神仙記』（明抄本注に「出『搜神記』」）。『太平御覽』卷第四十一引『幽明錄』、卷第八百六十二引『統齊諧記』。南宋・曾慥『類說』卷六引『伝記』。南宋・皇都風月主人『綠窓新話』卷上引『齊諧記』。※『蒙求集注』引『統齊諧記』。南宋・陳葆光『三洞群仙錄』卷十二。南宋・陳景沂『全芳備祖』後集卷五引『搜神記』。南宋・謝維新『事類備要』別集卷十一引『統齊諧』。南宋・佚名『錦繡万花谷別集』別集卷之二十一。</p>	<p>△『太平広記』卷五十引『伝奇』。宋・陸佃『增修埤雅広要』卷三十四引『太平広記』。南宋・曾慥『類說』卷三十二引『伝奇』。※南宋・皇都風月主人</p>
<p>元・趙道一『歷世眞仙體道通鑑』後集卷四。明・蔣一葵『堯山堂外紀』卷三十二。明・彭大翼『山堂肆考』卷一百五十。明・田芸衡『詩女史』卷七。明・王世貞『艷異編』卷二。清・王初桐『舊史』卷七引『伝奇』。「藍橋記」（『清平山堂話本』）。〈略〉</p>	
<p>「裴航相遇樂」（南宋・周密『武林旧事』卷四）。楊星水「玉杵」（明・呂天成『曲品』卷下）。「此合裴航、崔護而成。選事頗佳、而詞多剽</p>	

<p>卷数</p>	<p>篇名</p>	<p>同話・類話（以前）</p>	<p>同話・類話（以降）</p>	<p>備考</p>
		<p>『綠窓新話』卷上引『伝奇』。南宋・陳葆光『三洞群仙錄』卷一引『伝奇』。南宋・計有功『唐詩紀事』卷第四十八。南宋・佚名『錦繡万花谷』卷十六引『伝奇』。南宋・朱勝非『紺珠集』卷十一引『伝奇』。南宋・祝穆『事文類聚』前集卷三十四引『伝奇』。</p>		<p>襲。」とある。）庚吉甫「裴航遇雲英」（明・臧懋循『論曲』）。「藍橋記」（明・晁瑛『晁氏宝文堂書目』。呂天成「藍橋、楊文烟「玉杵」（明・祁彪佳『遠山堂曲品』。また『遠山堂曲品』に「玉杵」、藍橋玉杵事。呂津龍、朱陵皆有『藍橋記』、楊星水亦有『玉杵記』此噴出逐壻溺女、後始会藍橋之杵、饒舌甚矣。詞中往往披沙見宝、而韻曲多訛、幾不可讀、良以無善本故也。」とある。）明・鄒迪光『始青閣稿』卷九「周承明有端午前一日蔚藍堂觀演裴航伝奇之作余於午日集客觀劇就其韻和之」、卷六「鴻宝堂秋蘭花下留錢徵采小集看演藍橋伝奇錢有作和韻」。清・石牧「裴航</p>

不負心類	○李亜仙不負鄭元和	南宋・皇都風月主人『緑窓新話』卷上。宋・佚名『錦繡万花谷』卷十六引『太平広記』。宋・佚名『古今類事』卷十七引『秘閣閒談』。宋・祝穆『事文類聚』後集卷十四引『太平広記』。	
癸集卷二重円故事会	○韓翃柳氏遠離再会	唐・孟榮『本事詩』。△『太平広記』卷四百八十五「柳氏伝」。※南宋・曾慥『類説』卷二十八引『異聞集』。南宋・皇都風月主人『緑窓新話』卷上引『異志』。南宋・陳応行『吟窓雜録』卷四十一。南宋・佚名『錦繡万花谷』後集卷十五。南宋・尤	明・彭大翼『山堂肆考』卷九十九引『異聞録』。明・湯頭祖『虞初志』卷六。明・田芸蘅『詩女史』卷八。清・馮金伯『詞苑萃編』卷十引『太平広記』。(略)
		明・馮夢龍『情史』卷十六。明・陳耀文『天中記』卷二十引『異聞集』。明・梅鼎祚『青泥蓮花記』卷四。明・湯頭祖『虞初志』卷五。清・王初桐『蠶史』卷二十四引「沂国夫人伝」。清・俞正燮『癸巳存稿』卷十四引『太平広記』。(略)	「繡襦記」(明・毛晋『六十種曲』)

離妻復合	張時与福娘再会	同話・類話(以前)	同話・類話(以降)	備考
錢穆離妻而後再合		表『全唐詩話』卷二。		

【凡例】

本表は、『酔翁談録』所収の全八十話について、その同話・類話を、『酔翁談録』以前(宋以前)と、以降(元以後)に分けて整理したものである。なお、『事林広記』は各版本の異同が多いので、表に版本を明記する。備考には、戯曲において詩や話の一部が取り入れられていたり、大きな改作が行われたりしているもの、及び話に関連のある記載を記した。

篇名に○が付いているものは、本稿で考察の対象とした作品である。

△は、『酔翁談録』(古典文学出版社、一九五七年)の指摘に拠る。

▲は、△以外の先行研究に拠る。

〈略〉は、これらの作品を収録した明清の書物が多かったため、『佩文韻府』や『淵鑑類函』などの類書を省略した場合に用いた。

※は、『酔翁談録』の本文と最も近い文を載せる書物である。